

自尊感情と自己概念の明確性および時間的安定性

井上祥治 (岡山大学教育学部)

本研究は、自尊感情水準の高低と自己概念の明確性およびその時間的安定性との関係を調べるものである。これまでの研究から低自尊感情者は、高自尊感情者と比較して、自己概念が曖昧または中間的であることが確認されている。また、低自尊感情者は高自尊感情者と比較して自己概念の変動性が高いことも確認されている。しかし、これらの知見は、それぞれ異なる被験者について得られたものである。本研究では同じ被験者について自己概念の明確性および時間的安定性を調べた。結果は別々の被験者から得られた結果と一致していた。同一の被験者においても低自尊感情者は、高自尊感情者よりも、自己概念の明確性および時間的安定性が低かった。

キーワード: Self-Esteem, Clarity of Self-Concept, temporal stability of Self-Concept

I. 研究目的

Tice(1993)は特性自尊感情において、高自尊感情者は自分自身について非常に肯定的な選択肢に記入する人々、つまり、基本的にはいろいろなやり方で高いことを主張する人々であるが、しかし低自尊感情者はその反対ではない。低自尊感情者は自分自身を価値の無い、無能力な失敗者とは見ていない。むしろ低自尊感情者は強く肯定的な特性または強く否定的な特性のいずれも自分自身に帰属させないといった、実際には中立的な自己記述をする人々である。低自尊感情者は相対的な意味においてのみ、つまり高自尊感情者が自分自身を実物以上に見せるやり方と比較して、自尊感情が低いのであり、したがって低自尊感情者は一般的には自分自身を中立的、あいまいなやり方で見たり、自己呈示するのだと主張する。

Campbell(1990)は自尊感情の重要な随伴性質は自己概念の確かさまたは明確さの程度であると主張する。

Campbell and Lavalley(1993)は、高自尊感情者は自己について肯定的なはっきりとした見方を持っている。対照的に低自尊感情者は自己についてはっきりとした否定的な見方を持っているのではない。低自尊感情者の自己観は、事実上、評価的には中立的であり、また高水準の不確かさ、不安定さおよび一貫性の低さによって特徴づけられるという。自尊感情水準における自己知識構造の明確さのこのような相違が社会的行動(例えば、競争、同調、魅力、因果帰属、達成、援助、ストレスへの取り組み)での自尊感情の広汎な効果差

を説明するのに有効であると主張する。

Campbell(1990)は自己概念を「人が自身の属性について持っている信念である自己シエマの知識的観点」に限定し、自尊感情を「自己シエマの評価的要因、つまり評価の対象として自己を見た産物である自己反射的な態度」に限定する。評価的要因である自尊感情には一時的な状態自尊感情と長期的な特性自尊感情が存在することが一般に示唆されているが、Campbell(1990)は特性自尊感情を取り扱っている。また、知識的要因である自己概念はその内容およびその構造の両方の観点で記述できるが、Campbell(1990)が問題としているのは内容ではなく構造の明確さ、つまり内容または自己信念が明確にかつ確信に満ちて定義されており、時間的に安定であり、内的に一貫している程度である。

Campbell and Lavalley(1993)は、低自尊感情者の自己概念が、高自尊感情者の自己概念よりも、よりいっそう不確かであるということが確認されれば、次のような長年論争されてきた自尊感情に関する重要な問題の解決に有効な示唆を提供することができるという。

高自尊感情者と比較して、低自尊感情者は自己関連の意味を持つ外的な手掛かりにいっそう依存적であり、また影響を受けやすいという知見は一般的に支持されている(例えば、Schrauger, 1975)。なぜ低自尊感情者はそうであるのかについての解釈は自己高揚説と自己一貫説の間で争われてきた。現在は、社会的フィー

ドバックへの認知的反応は自己一貫説に一致し、感情的反応は自己高揚説に一致することが支持されている (McFarlin & Blascovich, 1981)。

フィードバックへの感情的反応は、一般的に人は否定的なフィードバックに対して苦痛を示し、肯定的なフィードバックに対して快を示すという原理に基づいている。自尊感情差がある場合には、低自尊感情者はよりいっそう否定的な自己観を持っているから、彼らは高自尊感情者よりもより大きな自己高揚欲求を持ち、それゆえに否定的なフィードバックによっていっそう脅かされる傾向があり、肯定的なフィードバックによっていっそう喜ぶことになる。これまでの研究は自尊感情差がもたらすこの事実を確認している (Campbell & Lavalley, 1993)。

フィードバックへの認知的反応は、一般的に人は自己シエマと一致している外的な情報をいっそう認知的に受け入れ易いという原理に基づいている。低自尊感情者はよりいっそう否定的な自己観を持っているから、否定的な情報が彼らの自己観と一致する度合いは高自尊感情者よりもいっそう高く、それゆえにいっそう受け入れられ易い。この事実はこれまでの研究によって確認されている。しかし、自己一貫性原理からは、低自尊感情者は高自尊感情者よりも肯定的フィードバックを受け入れることが少ないということもまた予言されなければならない (Campbell & Lavalley, 1993)。しかし、Zuckerman (1979) は肯定的フィードバックの受け入れでの自尊感情差は一般的に弱いかまたは支持されていないと結論している。さらに Campbell and Fairey (1985) は批判的なフィードバックが無いかまたは統制条件を導入した実験を行い、高自尊感情者では肯定的なく (それゆえ彼らにとっては自己観と一致した) フィードバックのみを受け入れかつそれによってのみ影響を受けたことを確認した。しかし、低自尊感情者は肯定的および否定的情報の両方を受け入れそして両方によって影響されることを確認している。

感情反応および認知的反応のいずれも、自己概念の肯定性 (positivity) または否定性 (negativity) に基づいている。高自尊感情者はいっそう肯定的な属性で自身を記述することから肯定的自己概念を持ち、低自尊感情者はいっそう否定的な属性で自身を記述することから否定的自己概念を持つという原理である。しかし、この原理では以上の知見全体を合理的に説明する

ことはできない。つまり、高自尊感情者についてはうまく説明することができるけれども、低自尊感情者については肯定的フィードバックを受け入れることが少ないということは実証されなかったという事実、評価的には中立的な手掛かりにさえも影響されるという事実を説明することができない。代わりに、高自尊感情者と比較して低自尊感情者は明確でない、混乱した、不確かな自己概念を持つということによって合理的に説明され得る (Campbell & Lavalley, 1993)。人が明確なかつ確信のある自己定義を欠いている場合、人は外的な手掛かりあるいは基準によりいっそう依存せざるを得ず、それゆえに外的な情報に影響され易くなる。このことはある領域における知覚された専門性、能力、自信の欠如はその領域における外的影響を受けやすいという同調行動に関する研究からも支持されている (Campbell, Tesser, & Fairey, 1986)。

Campbell (1990) は第一研究で、自己概念の確かさについて低自尊感情者は、高自尊感情者と比較して曖昧であることを確認している。また、井上・福本・菅野 (1996) は追試を行いこの傾向を確認している。Campbell (1990) は第二研究で自己概念の時間的安定性について低自尊感情者は、高自尊感情者と比較して時間的安定性が低いことを確認している。井上 (1998) は追試を行いこの傾向を確認している。これらの事実から、低自尊感情者は、高自尊感情者と比較して、自己概念の明確性が低くそしてその反応への確信度も低いこと、および自己概念が時間的に安定性も低いと結論することができよう。しかし、Campbell (1990) の第一研究および第二研究における被験者はそれぞれ異なる被験者であり、また井上・福本・菅野 (1996) と井上 (1998) の被験者も異なる被験者である。被験者が異なることは、高自尊感情と低自尊感情の設定水準が異なることもあり得る。つまり、それぞれの研究における自尊感情の高低の判別基準が異なり、自己概念明確性および時間的安定性は同じ自尊感情水準で見られるのか、それぞれ異なる水準で見られるのかが明確ではない。

本研究では、一貫して同じ被験者を用い、自己概念の明確性および時間的安定性についての自尊感情水準差による相違を確認することを目的とする。これによって、同一の自尊感情水準による自己概念の明確性、時間的安定性についての知見を得ることができると考える。

II. 方法

被験者は集団心理学受講生（男子43名、女子111名、計154名）である。一組の質問紙が配付され回答するよう求められた。質問紙は自尊感情に関する測度、自己概念の確かさまたは明確性に関する測度、自己概念の確かさまたは明確性の評定への確信度に関する測度、Janis and Field(1959)の自尊感情（被説得性）尺度（23項目）および顕在性不安尺度(MAS; 50項目)から構成されている。この尺度のうち、Janis and field(1959)尺度および顕在性不安尺度についての分析は、研究の目的に照らして、本論文では述べない。自尊感情測度はRosenberg(1965)の全体的自尊感情尺度（10項目、4件法）である。自己概念明確性の測度は15の両極形容詞対で構成され、被験者は各対について自身をどのように見ているかを示すよう求められる。15対は、やることが変わりばえのしない—お天気やでどう変わるかわからない、馬鹿なことをする—一生真面目な、人の気をそらさない—遠慮のない、型にはまった—型にはまらない、主張的な—人当たりのよい、謹厳な—気楽な、静かな—陽気で騒々しい、慎重な—自発的な、競争的な—協同的な、おとなしい—率直な、独立的な—依存的な、慎重な—冒険的な、野心的な—のんびりした、浪費的な—儉約的な、従順な—支配的なである。各対ともどちらの極にどのくらい自身が当てはまるかを7件法で回答する。評定の確信度は各対についての自身の評定に対してどのくらい確信を持っているかを全く確信がないから非常に確信があるの5件法で回答する。対人場面での自己概念は、Campbell(1990)の用いた20の対人的行動を示す形容詞尺度であり、それぞれの形容詞について一般的に自分は社会的相互作用場面でどのくらいそのように振る舞うかを回答するものである。まったくあてはまらないから非常にあてはまるまでの7件法で評定する。20の形容詞のうち、10形容詞は望ましいもの（思いやりのある、好意的な、考えを明確に表現する、主張すべきは主張する、友好的に、温かい、話好きな、知的な、自信に満ちた、人に好かれる）であり、10形容詞は望ましくないもの（不愉快な、無作法な、防衛的な、ごう慢な、引っ込み思案の、退屈な、まごまごした、ごちなく、緊張して、冷たい）である。また、この対人場面での自己概念は約2ヶ月後にもう一度実施された。

III. 結果

1. 自己概念の明確性

(1) 自尊感情水準の設定

Rosenberg(1965)の自尊感情尺度得点（得点範囲は10点から40点）、は、男子は平均値が26.63、標準偏差5.56であり、女子は平均値が24.65、標準偏差は3.64であった。男子と女子の平均値に差がみられるかについてt検定を実施した結果、5%水準で有意差がみられ($t(56.6)=2.162, p<.04$)、男子が高かった。性差がみられたので、男女別々に基準化をおこなった。基準化された自尊感情得点の1以上を高自尊感情群($n=26$)、-1以下を低自尊感情群($N=21$)、その間に入るものを中自尊感情群($N=107$)とした。

(2) 社会的望ましさの認められる対の除去

Campbell(1990)は形容詞対の選択にあたって社会的望ましさが異ならないよう慎重に対を選んでいるのであるが、それでもなお社会的望ましさが混入している危険性がある。また日本語に翻訳された場合には翻訳そのものによる語感の相違や文化差によって新たに社会的望ましさが生じる可能性がある。そこで自尊感情得点の中央値で2群に折半した高自尊感情者と低自尊感情者で各形容詞対について分布の違いが見られるかを検討した。その結果、おとなしい対率直な対で分布に相違がみられた($\chi^2(6, N=154)=12.73, P<.05$)。したがってこの対を分析から除去した。

(3) 自己概念明確性（反応の極端性）の指標

各被験者について、Campbell(1990)の用いた3指標を算出した。14対のそれぞれについて、中点(4点)からの絶対差を計算し、その合計値の平均値を算出した。これを尺度中央点からの偏差絶対値の平均と呼ぶことにする。14対の反応の平均値を計算し、それからの各対の反応点の偏差を求めることによって標準偏差を算出した。これを反応の標準偏差と呼ぶことにする。14対の各対で1および2点または6および7点に反応した数を算出した。これを極端反応の個数と呼ぶことにする。

(4) 反応確信度の指標

14対のそれぞれについての評定の確信度の平均値を算出した。これを評定確信度と呼ぶことにする。

(5) 3つの自己概念明確性(極端性)指標間の相関関係

尺度中央点からの偏差絶対値、反応の標準偏差、極端反応の個数の3つの指標間の相関関係が表1に示さ

れている。相関値は.943 から.921 の間にあり、3つの指標間に高い相関が認められる。これは3指標が自己概念明確性の指標として相互に高い共通性を持つことを意味している。

表1 3つの極端性測度の相関

極端性測度	a	b	c
a. 尺度中央点からの偏差絶対値	1.000		
b. 反応の標準偏差	.943	1.000	
c. 極端反応の個数	.932	.921	1.000

N=154, 相関値 はすべて $p < .01$ (両側検定)

(6) 3つの指標それぞれと評定確信度との相関関係

3つの指標のそれぞれと評定確信度との相関は、.544から.557にわたり有意(すべて $P < .01$)である。これは自己概念が明確に定義されている被験者ほど確信を持って反応することを示している。

(7) 自尊感情水準と3つの指標、評定確信度の関係

自尊感情水準の違いによって3つの極端性指標、評定確信度に違いが見られるかどうかを分析したものが表2である。尺度中央点からの偏差絶対値の平均では自尊感情水準の高群と低群の間に有意差がみられ、低群は高群と比較して、曖昧さを意味している中央点により近いところに反応している、つまり自己概念の明確さが高群と比較して低いことを示している。このことは両群の極端反応の個数においても有意な差が認められることから支持される。反応の標準偏差では傾向差にとどまっているが支持する方向を示しているといえよう。評定確信度は、低群は高群よりも有意に確信度が低いことが示されている。これらの結果から、低自尊感情者は、高自尊感情者と比較して自己概念の明確性が低くまた自己概念についての確信が低いということを支持している。

2. 自己概念の時間的安定性

(1) 自己概念の時間的安定性に関する4つの指標の算出

a. 20のそれぞれの対人的行動形容詞について、時間1での反応と時間2での反応の間の差の絶対値を算出する。この絶対値の平均は2回の検査において被験者が自身の評定を変えた程度についての全般的な測度である。これを差の絶対値と呼ぶ。

b. 2回の検査で変化を示した形容詞の数を算出する。これを変動項目数と呼ぶ。

c. 2回の検査での個々の形容詞の反応差を調整した平均値を算出する。例えば、最初の評定が選択肢の1かまたは7(いずれも最端)であれば、2回目に変化する最大可能得点差は6となる。また、最初の評定が4(中央)であれば、2回目に変化する最大可能得点差は3になる。変化可能最大得点に対する実際の変化差の割合として算出する。これは変化量の指標となる。これを調整された差と呼ぶ。

d. 2回の検査間の被験者内相関係数を算出する。

Fisherの r -to- z 変換を行う。これは個々の形容詞に対する反応が2回にわたって全体としてどのくらい類似して位置づけられているかを評価するものである。これを被験者内相関係数と呼ぶ。

(2) 4つの時間的安定性指標の間の相関

表3に示される結果から、4つの安定性指標の間には高い相関がある。全般的な指標である差の絶対値の平均は、変動項目数および調整された差の平均と正の高い相関がある。これは差が大きいくほど、変動する項目(形容詞)の数も多くなり、変化可能最大得点に対する実際の変化割合も大きくなることを示している。被験者内相関係数は他の3指標と負の相関を示しており、時間1と時間2で変動することが少ないほど、各形容詞についての被験者内相関が高い、つまり各形容詞への回答選択肢の選択位置に変動が少ないことを示している。

表2 3つの極端性測度および評定確信度の自尊感情水準による一元配置分散分析

a. 尺度中央点からの偏差絶対値							
自尊感情							
低	中	高	DF	F	p	Dunnettのt (片側)	
1.33(0.39)	1.17(0.37)	1.60(0.60)	2/151	10.36	<.001	低対中 ns, 低対高 <.023	
b. 反応の標準偏差							
自尊感情							
低	中	高	DF	F	p	Dunnettのt (片側)	
1.56(0.42)	1.36(0.38)	1.77(0.58)	2/151	8.65	<.001	低対中 ns, 低対高 <.075	
c. 極端反応の個数							
自尊感情							
低	中	高	DF	F	p	Dunnettのt (片側)	
0.40(0.21)	0.31(0.21)	0.53(0.29)	2/151	9.46	<.001	低対中 ns, 低対高 <.040	
d. 評定確信度							
自尊感情							
低	中	高	DF	F	p	Dunnettのt (片側)	
3.57(0.44)	3.55(0.43)	4.05(0.33)	2/151	12.48	<.001	低対中 ns, 低対高 <.001	

表3 4つの安定性測度の相関

安定性測度	a	b	c	d
a. 差の絶対値	1.000			
b. 変動項目数	.841	1.000		
c. 調整された差	.968	.861	1.000	
d. 被験者内相関係数(r-T0-z)	-.557	-.484	-.633	1.000

N=154, 相関値はすべて $p < .01$ (両側検定)

(4) 4つの時間的安定性指標の自尊感情水準間の差異
高自尊感情群と低自尊感情群の間には、4つの時間的安定性指標に関して差異があるかどうかを示したものが表4である。差の絶対値の平均では高自尊感情群と低自尊感情群の間に有意な差が認められ、高自尊感情の方が低自尊感情よりも変動が小さい。また、調整された差の平均および被験者内相関係数では傾向差が

認められる。低自尊感情と比較して高自尊感情は選択肢の変化量が小さく、選択肢反応位置を変えることが少ない傾向があることを意味している。変動項目数は有意な差をもたらすには至っていない。

これらの結果を総合してみると、低自尊感情者と比較して高自尊感情者は自己概念が時間的に安定していると結論することができよう。

表 4 差の絶対値、変動項目数、調整された差および被験者内相関係数の自尊感情水準による一元配置分散分析

a. 差の絶対値						
自尊感情			DF	F	p	Dunnettのt (片側)
低	中	高				
19.46(6.59)	13.92(4.91)	16.33(6.61)	2/151	11.30	<.001	低対中<0.001, 低対高<.046
b. 変動項目数						
自尊感情			DF	F	p	Dunnettのt (片側)
低	中	高				
12.65(2.90)	10.76(2.85)	11.05(2.78)	2/151	4.63	<.011	低対中<.003, 低対高<.049
c. 調整された差						
自尊感情			DF	F	p	Dunnettのt (片側)
低	中	高				
462.88(156.78)	342.82(119.05)	368.49(132.98)	2/151	9.22	<.001	低対中<.001, 低対高<.012
d. 被験者内相関係数						
自尊感情			DF	F	p	Dunnettのt (片側)
低	中	高				
0.66(0.35)	0.82(0.33)	1.02(0.27)	2/151	6.97	<.001	低対中<.026, 低対高<.001

IV. 考 察

低自尊感情者が、高自尊感情者と比較してより不確かな自己概念を持つのであれば、低自尊感情者は自己記述で極端さの少ないことを示すであろうという仮説は支持されたといえよう。低自尊感情者は、高自尊感情者と比較して、中間的な評定を与える傾向を示した。またその評定についての確信度も低かった。このことは低自尊感情者は自分は誰なのか、何であるのかについてははっきりしない人であることを示している。この自己概念の不明確さが高自尊感情者と低自尊感情者との間の社会的行動の相違をもたらす有力な根拠であることが確信される。本研究では同一の被験者を用いているから、低自尊感情者は同時に時間的にも不安定な自己概念を持っていることが明らかとなった。同調行動の研究に見られるように、このことが低自尊感情者をして社会的な圧力に影響されやすくしている要因の

ひとつであると考察される。

本標本では、低自尊感情者と高自尊感情者との間に自己概念の明確性および安定性に差異が認められるのは自尊感情得点の平均値±1.0標準偏差値で高自尊感情と低自尊感情を区分した場合であった。平均値±0.5標準偏差の区分では自己概念の時間的安定性では、低自尊感情者は高自尊感情者よりも時間的安定性には有意差が見られたが、自己概念明確性では有意差が見られなかった。このことは、高自尊感情者と低自尊感情者の間に自己概念の明確性および時間的安定性が同時に現れるのは、自尊感情水準がかなり極端に離れている場合であろうと思われる。このことは、また、自己概念の明確性と時間的安定性が現れる自尊感情水準は異なるということを示している。

引用・参考文献

- Campbell, J.D. 1990 Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 538-549.
- Campbell, J.D., & Fairey, P.J. 1985 Effects of self-esteem, hypothetical explanations, and verbalization of expectations on future performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1097-1111.
- Campbell, J.D., Tesser, A., & Fairey, P.J. 1986 Conformity and attention to the stimulus : Some temporal and contextual dynamics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 315-324.
- Campbell, J.D., & Lavalley, L.F. 1993 Who am I? The Role of Self-Concept Confusion in Understanding the Behavior of People With Low Self-Esteem. In Baumeister, R.F. (Ed.) *Self-Esteem: The puzzle of low self-regard*. Plenum.
- 井上祥治・福本佳由・菅野晶江 1996 自尊感情と自己概念明確性に関する実証的研究 岡山大学教育学部研究集録 第103号 149-154.
- 井上祥治 1988 自尊感情と自己概念の時間的安定性 岡山大学教育学部研究集録 第 108号 101-105.
- Janis, I.L., & Field, P.B. 1959 Sex differences and personality factors related to Persuasibility. In Hovland, C.I., & Janis, I.L., (Eds.) *Personality and Persuasibility*. New York : Holt.
- Taylor, J.A., 阿部満州・高石 昇 1985 日本版MMPI 顕在性不安検査使用手引き 三京房.
- McFarlin, D.B., & Blascovich, J. 1981 Effects of self-esteem and performance on future affective preferences and cognitive expectations. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 521-531.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton university Press.
- Tice, D., 1993 The social motivations of people with low self-esteem. In Baumeister, R.F. (Ed.) *Self-Esteem : The puzzle of low self-regard*. Plenum.
- Zuckerman, M. 1979 Attribution of success and failure revised, or : The motivational bias is alive and well in attribution theory. *Journal of Personality*, 47, 245-287 .

Title : A Study of Relationship between Self-Esteem, Clarity of Self-Concept, and Temporal Stability of Self-Concept

Shoji INOUE (Faculty of Education Okayama University)

Abstract : This article examines relationship between self-esteem, clarity of self-concept, and temporal stability of self-concept within identical person. This study tested the hypothesis that the self-concepts of low self-esteem people have less clarity or certainty than those of high self-esteem people.

Low self-esteem subjects exhibited less extremity and self-reported confidence when rating themselves on bipolar trait adjectives, less temporal stability in their trait ratings about a 2-month interval.

Keywords : Self-Esteem, Clarity of self-concept, Temporal stability of self-concept
